

"学ぶ"に寄り添う
コミュニケーションマガジン

社内報アワード
受賞

NEWS LETTER

SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.
284
Dec.2022

第3回 聖学院SDGsコンテスト
フォト&ムービー部門
受賞作品発表

特集

— 聖学院創立120周年へ向けて —
原点から未来へ

巻頭座談会

120周年委員3名による
トークセッション

みんなのビジョン

SEIG Voice

各校・各園卒業生インタビュー

歩む人たち

聖学院中高卒業生 坂元 周さん

関係団体の皆さんにインタビュー

支える人たち

有限会社日東クリーンベスト 堀 克昭さん



140th Anniversary of the
Disciples' mission to Japan

CONTENTS

特集

01_ 原点から未来へ —聖学院創立120周年へ向けて—

120周年委員3名による
トークセッション

03_ &Talk

みんなのビジョン

07_ SEIG Voice

各校・各園卒業生インタビュー

11_ 歩む人たち [坂元 周さん]

関係団体の皆さんにインタビュー

12_ 支える人たち [堀 克昭さん]

13_ 第3回 聖学院SDGsコンテスト フォト&ムービー部門「未来に残したいもの」 受賞作品発表

14_ Seig NEWS

17_ 2023年、学校法人聖学院は創立120周年

120年の轍を歩む

19_ 聖学院歴史探訪 —聖学院の創設と発展(男子) 聖学院 上— [EPISODE #19]

聖学院ニュースレターアンケート

QRコードからあなたの声をきかせてください。
アンケートに回答いただいた方の中から抽選で
10名様に「聖学院オリジナル箸セット」をプレ
ゼント! いただいたご意見は、編集の上、本誌
にてご紹介させていただくことがあります。



- 有効回答期間
2022年12月23日～2023年2月17日
- 当選発表
当選者の発表は、賞品の発送をもって
代えさせていただきます。



本アンケートに関するお問い合わせ
聖学院広報センター Tel 03-3917-8530

特集

原点から未来へ

— 聖学院創立120周年へ向けて —

1903年、現在の文京区本郷の地に誕生した神学校から聖学院の歩みは始まりました。

“神を仰ぎ 人に仕う”この建学の精神を土台に

真理を探究すること、神と人間を知ること、社会に貢献することを目指す歩みは、決して平坦なものではありませんでした。

社会から求められる学びへの期待も大きく変化する中で、

12月号では、2023年に120周年を迎える聖学院教育の原点とこれからのビジョンについて考えてみたいと思います。



& Talk

特集 原点から未来へ

ただのマイルストーンではなく立ち止まり軌跡から学ぶ。
周年行事にはそういった意味があります。
これまでの道が正しかったとわかれば、
確信をもってこの先の一步も踏み出していきます。



いまむら あかり
今村 明里

女子聖学院中学校・高等学校卒業(61回生)。異業種事務職を経て、2018年より聖学院幼稚園・小学校事務室に入職。事務室の中では庶務業務の他広報行事運営・HP管理・広報配布物作成など主に広報業務を担っている。



しみず ひろゆき
清水 広幸

聖学院中高副校長兼運営統括部長。東京理科大学卒、物理科教諭。学校法人聖学院理事、創立120周年記念事業実行委員長。聖学院高校第72回卒、高校在学中に教会に通うようになり林田秀彦先生から受洗。キリスト教学校教育同盟中高部会委員長など。日本キリスト教団越谷教会員。



むらせ あまてお
村瀬 天出夫

聖学院大学准教授、学長補佐、グローバルキャンパスセンター所長。国際基督教大学卒、ハイデルベルク大学卒(博士)。学校法人聖学院創立120周年記念事業実行委員。聖学院高校第88回卒。共著・訳書に『科学史事典』『原典ルネサンス自然学』など。日本キリスト教団十貫坂教会員。

2023年に学校法人聖学院創立120周年を迎えるにあたり、法人内では周年行事の準備を進める120周年記念事業実行委員会が発足しています。委員会ではどういったことが話し合われ、どんな周年行事になるのでしょうか。また委員会を通じて思いを馳せたことや、聖学院の軌跡、未来について120周年委員であり、聖学院の卒業生でもある3名にお話をうかがいました。お集まりいただいたのは委員長であり理事長室会議委員でもある聖学院中高副校長の清水広幸先生、聖学院大学人文学部欧米文化学科の村瀬天出夫先生、聖学院小学校・幼稚園事務室の今村明里さんです。

教職員一体となって進める120周年

——120周年委員会とは、どのような組織ですか？

清水 学校法人聖学院の120周年を、どのように迎えるかを話し合う委員会です。法人が決めて各校が実行するという上意下達ではなく、各校各園みんなが主体でありみんなで祝うということを重視しています。そのため、法人の委員に加え、大学から小学校、幼稚園に至るまでの教員、職員、それぞれの代表1名ずつが参加し、計20名で構成されています。

村瀬 今は施策の具体的なアイデア出しを行っている段階です。Google

Jambor(※1)を使い、委員は各自のデバイスからアイデアを出し合います。付箋が次々と貼られ、まさに主体的で自由闊達なディスカッションが行われています。

清水 まず記念礼拝をきちんと執り行うことが決まっています。2023年10月28日に大学のチャペルで全教職員参加で捧げられます。大学のチャペルには今ハイポオルガンの導入が進められていて、その完成時期にも重なるため、パイプオルガンによる音楽会も開催します。その前後の日程で、今度は各校、各園で子どもたちが中心となって記念礼拝を行うことを予定しています。

今村 小学校でも、子どもたちがハンドベルを披露する案が出ています。

——120周年を象徴するロゴマークが決まりました。ロゴ決定までの経緯を教えてください。

村瀬 ロゴ決定までには様々な案が出ました。ぶどうの木をモチーフにし、その実が各校のスクールカラーになっている案や120周年の文字だけという案や120周年の文字だけという案や120周年の文字だけという案などもありました。デザイン会社の方にもいろいろ案を作っていたのですが「その上で、「みんな聖学院である」ということを象徴的に伝えられる案としてこのロゴに決まりました。

ロゴについては、立ち上げ予定の120周年のHPや広報物、郵便物等

に使っていきます。またアイデア段階ですが、様々な人が見て使っていたけるトートバックやマグカップなど記念グッズに展開していくことも考えています。私たちだけではなく、卒業生やこれから卒業生になる在校生、保護者の皆さまに120周年を迎えたことを覚えていただくことが大事だと思っています。

清水 120周年委員会の活動を通じて、聖学院は教員も職員も垣根がないということを感じました。何かについて委員全員で考えた時に、20人の教職員からたくさん意見が出てきました。その様子を見ていて立場は違えど聖学院への想いはみんな同じで、私たちの法人には素晴らしい教員、職員が大勢いるんだと改めて感じました。

私たち一人ひとりが歴史とのつながりを再確認する

——村瀬先生はドイツのハイデルベルク大学を卒業されています。海外では周年行事をどう迎えていますか？

村瀬 私が通ったハイデルベルク大学はヨーロッパの中でも特に古い大学で600年以上の歴史があります。キャンパスと街の間に境界線がなく、昔ながらのロマンチックな街並みの一部と





140th Anniversary of the Disciples' mission to Japan

聖学院設立120周年ロゴマーク

平和の象徴であるオリーブと鳩をモチーフに、聖学院カラーを用いた周年ロゴマークです。7つのオリーブの実、7つの学校を意味します。十字架を囲む小さな鳩と大きな鳩は、それぞれ生徒と教師の象徴であり、同じ目線で伴走する聖学院の姿勢を表しています。原点を想起させるきっかけになるように、ディサイプルス派日本伝道140周年の文字をマークの下に入れました。

(デザイン制作/株式会社デザインエイエム)



ロゴマーク決定までの経緯を振り返り、込められた想いを語り合う

して大学の校舎が点在しています。地域と大学が密接につながっていて、大学の歴史がそのまま街の歴史でもあるため、大学の周年行事は同時に町の記念として祝われます。

聖学院も駒込は、駅からの通りが「聖学院通り」という名前になっていて、聖学院も駒込が一体化しているように地域と学校が一体化していると思います。大学もこれを機に地域の方に来ていただいて、聖学院をもっと知って身近に感じてもらいたいと思っています。地域と結びつき一緒に祝える120周年になると嬉しいです。

清水 120周年ということは、この地域の方たちが生まれる前から聖学院が駒込にあつたわけですね。太平洋戦争の戦時下では、防空壕がほとんどなかったこの辺りの方々の避難所になっていたそうです。土地の方々は聖学院を大事なものとして、あるべき学校として、とても愛しておられたと聞いています。ですから、私も街の人たちと一緒に120周年を何らかの形でお祝いできれば良いなと思います。

——在校生にとって120周年とはどういう意味があると思いますか？

今村 幼稚園、小学校の子どもたちにとっては120周年といってもやはりイメージしにくいものではありません。ただお友だちが怪我をしたら自分のことのように感じて励ましながら保健室まで付き添ったり、悲しいことがあつたお友だちのために祈ったりしている

子どもたちの姿を目にすると、建学の精神が子どもたちにも受け継がれているのを感じます。ですので自分も長い歴史を紡ぐ一員として、大好きな聖学院の120回目の誕生日と一緒に祝うという気持ちで、子どもたちが120周年を迎えてくれたら良いかなと考えています。

村瀬 聖学院が120年続いているその背景には、先生方の努力と同時に、その教えを具現化してきた子どもたちや生徒、学生の存在も大きいと思います。彼らも歴史の一部です。勉強や様々な活動を通して、聖学院の歴史を支えている、自分には支える力があるんだということや子どもたち、生徒や学生には知ってほしいです。これは彼らのアイデンティティにもつながります。



創立時から大切にしてきた「人を育てる」ということ

——聖学院の軌跡について教えてください。

清水 19年前、今の文京区本郷3丁目の近くに聖学院神学校が作られました。聖学院の始まりです。3年後に最初の校舎が手狭になったため、現在の駒込に移転します。その当時駒込は全く開拓されていない椎木林だったそ

うです。校歌が「椎木茂る」という歌詞から始まるのもそういう理由です。そこを切り拓いて校舎を建て、神学校と英語学校と並んで普通教育を始めます。このように元来が、神を仰ぎ人に仕える牧師育成の学校だったため、普通教育においても人格教育を重視した学校になりました。そしてそれは今も変わりません。

——卒業生として聖学院にはどんな印象をもっていますか？

村瀬 私は聖学院中高で6年間を過ごしました。聖学院が他の学校と違うところは、学校教育の中に祈りがあることだと思っています。世界では普通のことですが、日本では祈る姿を見ることはほとんどありません。教育の場で「祈る人がいる」ということを知ること、「誰かに祈りながら生活する」ということは、それがすぐに信仰を伴うかどうかは別問題として、人間教育としては極めて重要なことだと思います。

清水 私は、聖学院で人を大切にすること、それを学びました。もともとキリスト教とは全く無縁でしたが、林田先生(※2)の聖書の授業を受けて、こういう世界があつて、そして先生の背後に神様がいらつしやるということを感じました。また林田先生は、生徒をとても大切にし温かい言葉をかけられる先生でした。こういう人になりたいと思ったのが私が教師を目指したきっかけでした。

今村 聖学院はのびのびと主体性を育

んでくれる場所だと、女子聖学院中
高在校時を振り返って感じます。女子聖
学院中高の一番大きなイベントとして
運動会があります。卒業生のほとんど
の方が思い出として語られる行事で
す。意見を出し合うところから、準
備、当日の進行まで全て生徒主体で進
められます。女子聖学院中高の運動会
は3色のチームに分かれて競い、高校
は学年で色が分かれてますが、中学はク
ラス内の抽選で各色のチームに振り分
けられます。その中学生の指導も高校
生が行います。生徒にとってはとにか
く熱が入り盛り上がる行事で、私もみ
んなで過去のDVDを見て勝つための
研究をした記憶があります。一つの目
標に対して生徒全員で協力して進めて
いくことを通して、私の中で主体性が
育まれたと感じています。

清水 聖学院中高が22年前に校舎を建
て替えた時、教育にも変化がありまし
た。校舎が新しくなるのに教育が今ま
でのままで良いのだろうかと思直しが
行われました。それまでは教員が個々
で奮闘していましたが、その頑張りを
教員全体で共有するようになりまし
た。そして一つの学年が良くなったら
それを他の学年に普及させようという
考えに変わりました。また林田先生が
オンライン教育を立ち上げ、なんの
ための学校なのかを考え、一人ひとりの
生徒を改めてしっかりと見ていくこと
になりました。それが体現され変わっ

てきた歴史があります。

私は120周年を機にそれぞれの学
校の歴史と伝統にもう一度目を向けて
もらいたいと思っています。それぞれ
の学校に転換期があります。そこに思
いを馳せ、我々の先人が、先輩の教職
員が本当に苦勞して受け継いできたバ
トンを次の100年に渡していく必要
があると感じています。

聖学院ビジョンも第二期へ 次の100年に向けて

—これからの聖学院に期待するこ
と、受け継いでいってほしいことなど
を教えてください。

清水 私は聖学院を本当に素晴らしい
学校だと思っています。ただ、まだま
だ聖学院の良さが知られていない気が
しています。120年前も今も共通し
ていることは一人ひとりの人格を愛す
ることだと思っています。それは聖
学院教育の根幹です。これからはより
一層広報に力を入れ、幅広く聖学院の
教育はこういう教育なんだということ
を知っていただく、それができたら良
いなと思っています。

また私は法人全体の方向性である聖
学院ビジョンを話し合う「理事長室会
議」の委員でもあります。120周年
である2023年は聖学院ビジョンが
第二期に入ります。キーマンページに
ついて改めて議論がなされました
が、第一期で掲げた「将来の日本およ

び国際社会に貢献する人間を育成」

「『誰一人取り残さない』世界の実現
を目指して」は変えずに更に推進して
いくことが確認されました。

村瀬 私が聖学院中高を卒業してから30
年、社会には様々な変化がありました。

グローバル化もその一つです。今の日本
は様々な国や文化に背景を持つ人々が一
緒に生活をし、支え合っています。教育
においてもグローバルという視点は必須
になっています。また社会変化の結果、
SDGsへの取り組みも重要です。そし
て何よりインターネットやスマホなど情
報化が進みました。コロナ禍により特に
ここ数年は加速したと思います。しかし
ICTには良い側面もあれば、危険な側
面もあります。デバイスをどう扱い、そ
の上で社会とつながりを維持していくの
かを子どもたちに教える必要があります。
今聖学院が法人として取り組んでい
るものの中でも国際、SDGs、情報教
育の3つは極めて重要だと思えます。駒
込にはこの3項目を小学校、女子聖学院
中高、聖学院中高の3校連携で研究する
「教育デザイン開発センター」が設置さ
れています。大学にも「グローバルキャ
ンパスセンター」「サステイナビリティ
推進センター」「教育開発センター」が
あります。物理的な距離の問題で今まで
難しかったものの、120周年を機に今
後は駒込と大学で連携して国際、
SDGs、情報教育を推進していけたら
と思っています。

今村 小学校、幼稚園では、まず「神

を仰ぎ人に仕う」建学の精神を育むこ
とが大切だと思っています。SDGs
の活動や社会貢献はとても大事なこと
で、高学年くらいになると授業でも取
り上げているのですが、幼い子どもた
ちにはやはり難しい事柄です。まずは
お友だちのことを思ったり、お友だち
のために祈ることなどから少しずつ始
めて「人に仕える」という気持ちを理
解していってほしいです。これからも
そういう姿勢を続
け、それが聖学院
ビジョンの「誰一
人取り残さない」
世界の実現につな
がったら良いと思
います。



清水 やはり物より精神の方が、人に
伝わっていくのだと感じます。聖学院
で学ぶ子どもたち、生徒、学生が先生
や職員から目に見えない精神を受け継
いで卒業していつてほしいです。さら
には社会で世界で、それを実践してく
れたらと考えています。

(取材日/2022年10月)

※1 Jamboardは、Jamboardデバイス(GSuite
サービスと連携する55インチのデジタルホワイトボ
ード)とフラウサ、モバイルアプリのいずれかを使用
してリアルタイムで共同作業できるデジタルホワイト
ボードです。
(出典: Google/Jamboard Help
https://support.google.com/jamboard/an-
swer/7424362?hl=ja)

※2 聖学院中高第八代校長 林田秀彦先生。

みんなのビジョン

SEIG Voice

2023年、聖学院ビジョン（中期計画）第二期がスタートします。
中期計画は理事長室会議にて話し合われますが、
学内外の関係者はどんなビジョンを持っているのでしょうか。
これまでの経験や、これからの聖学院に望むこと。
在校生、保護者、教職員、卒業生、関係団体の方々に聞いてみました。



持続可能な世界の実現に向けて 行動できる学校にしたい

ネイザン・ブレイクスリー
Nathan Alexander Blakeslee先生
(女子聖学院中学校・高等学校 英語科教諭
Native English Teacher Coordinator)

私は女子聖中高で18年教えています。女子聖は様々なタイプの生徒の、それぞれ違った学びへの興味を受け入れられる学校だと感じています。女子聖で実現したいことは2つあります。1つは、生徒たちが学校内で野菜の栽培を学び、自分たちで育てた野菜を食材として、購買部で調理して提供するということ。2つ目は、太陽光や風力などの再生可能エネルギーを学校に導入したいというアイデアです。持続可能な世界の実現に向けて、SDGsを学ぶだけでなく、行動につなげるべきだと考えています。

I've been teaching for 18 years in JSG. I feel that JSG can accommodate many types of students with different learning interests. I have a vision of two feasible things in JSG. First, I wish that JSG grew its own vegetables that the kobai-bu used to make food. Second, I wish JSG used more sustainable electrical resources such as solar panels and windmills. To realize a sustainable world, I think that we must not only learn about SDGs but also take action.

ASF NEWS & NEWS LETTER review

(ASF NEWS No.59 P07、小山 浩史さんのコメント概略)



「上尾周辺でのボランティア活動に限らず、教会やクリスマスツリーがランドマークになっていることや大学が防災拠点になっていることなど、聖学院は地域に根ざした存在です。」

CATEGORY
01



社会貢献 地域連携



キラリと光る個性的な学校として 学び直しの提供を

佐藤 光敏 さん
(上尾市職員)

聖学院大学とは市民としてイベント参加をきっかけにご縁をいただき、現在は大学院の聴講生として学んでいます。緑豊かで穏やかな環境の中、教職員の皆さんもフレンドリーで親しみやすい学校という印象があります。以前、上尾市内の施設で映画の上映会を開催する際に、作品にちなんだ解説をお願いしたいと相談したところ、職員の方々が親身になって話を聞いてくれ、ステキな先生をご紹介くださいました。映画会当日は、来場の皆さんにとっても喜んでいただきました。これから小さくともキラリと光る個性的な学校であっていただきたいと期待しています。現役大学生に加え、生涯学習として学ぶ人やリスキングとして学ぶ人などが、相互に交流する多様性のある場になったらステキですね。



子どもたちにとって 安心できる場所



これからも地元から愛され、 ホッとする場所であってほしい

関 雄次さん
(聖学院みどり幼稚園 保護者・卒園生)

みどり幼稚園はとにかく「やってみる」を大切にしてくれます。遊びからの学びが心を成長させ、一人ひとりが自分の居場所に誇りや自信を持つことができます。丁寧なお祈りに包まれて、感謝の気持ちや優しい心遣いが育ちます。私は第2期の卒園生で、娘3人もお世話になりました。在園時の先生に長女のクラスを受け持っていたいただき、奇跡のようでした。娘たちの行事にも楽しく参加させていただきました。みどり幼稚園で学んだ園児たちは本当に気持ちが温かい人が多いです。卒園しても「お帰り」「ただいま」と帰れる幼稚園です。これからも地元から愛され、ホッとする場所であってほしいです。また、自然が多く大きな園庭も変わらずにいてほしいです。



子どもたちや保護者の 心の支えとなれるような 学校であれたら

ほんがいのしゅり
半谷 樹理先生
(聖学院幼稚園 教諭)

聖学院は一人ひとりを愛し、大切に思ってください学校だと思っています。私自身、女子聖学院在学時に当時の宗教主任の先生に寄り添っていただきました。進路に迷っていた際、バングラデッシュへのスタディーツアーの参加を勧めいただき、その時出会った子どもたちが目を輝かせて学校で過ごす姿が忘れられず、保育の現場に立ち続けています。今後も聖学院は、まず私達教師が子どもたち一人ひとりを愛し信頼することで、子どもたちや保護者の方々に安心していただける、心の支えとなれるような学校であれたらと思います。また、各校の枠をもっと解き放ち、縦のつながりをより密接に連携していけたら、上手く稼働する部分があるのではないかと感じます。



子どもたちが安心して成長できる 場所であり続けてほしい

富田 菜穂子さん
(聖学院幼稚園 保護者委員)

聖学院は子どもたちがのびのびと自分らしくいられる幼稚園だと思います。お互いの個性を受け入れながら、心も体も成長できているように思います。今年の年長はコロナでほとんどの行事を通常の形で行えませんでした。先生方がその時々状況に合わせて工夫を凝らし、子どもたちのためにできることを一生懸命に考え実現してくださいました。特に泊まり保育では、弾けるような子どもたちの笑顔をたくさん見ることができました。初めての親子遠足で行ったお芋掘りも最高の思い出になりました。子どもたちを取り巻く環境はどんどん変化していますが、これからも聖学院は変わることなく、子どもたちが安心して成長できる場所であり続けてほしいと願います。



一生懸命があふれている、 毎日が魅力的な生活の場です

こうだいくえ
国府田 郁絵先生
(聖学院みどり幼稚園 主幹教諭)

聖学院みどり幼稚園は、神様から愛されているかけがえのない存在として、一人ひとりの心や姿、一人ひとりにとっての時間や環境が大切に考えられている教育現場だと思います。小さな子どもたちの一生懸命があふれている、毎日が魅力的な生活の場です。泣く、笑う、歌う、考える、困る、喜ぶなど、子どもたちの心が動いている証である表情や姿に出会うと、その一つひとつや一瞬一瞬をより愛おしく感じます。これからも、「今ここにいる人々にとっては、そこが安心して自分らしく過ごせる場所」、「もうここを巣立った人々にとっても気持ちの拠り所となる場所」、そのような聖学院でありたいと思います。

ASF NEWS & NEWS LETTER review

(ASF NEWS No.60 P08、高須 萌先生のコメント概略)



「幼稚園が子どもたちにとって、安心して過ごせる場所、自分らしくいられる場所であることを心がけています。子どもは認めてもらえるとうちに良い笑顔になります。」

(ASF NEWS No.60 P07、古田 しおん先生のコメント概略)



「みどり幼稚園は子ども中心で保育を考えます。子どもの興味を大切にし、遊びを深めたり、最後までやりきったりすることが非認知能力を育て、後の探究的な学習にもつながります。」



ESD・SDGs教育の ロールモデルとなる学校に

いざわ ともひろ
井澤 友郭 さん
こども国連環境会議推進協会 事務局長
ESD・SDGs教育ユニットアドバイザー

聖学院中高では、レゴ®を使った中1のSDGsワークショップや中3の糸魚川農村体験事前学習を毎年担当しています。過去「こういう生徒に育ててほしい」というゴールイメージを言語化する教員研修にも関わりました。聖学院中高の先生は、どんな生徒に育ててほしいのかという目的がしっかりしているので、コロナ禍のような変化も前向きに捉えることができ、チャレンジする先生を応援する文化があります。また、私も参加している聖学院のESD・SDGs教育ユニットの取組みは意義のあるものです。単にSDGsを学習テーマとするだけでなく、持続可能な社会の創り手を育む学びの場を実現し、SDGsを学校運営の要においた、ロールモデルとなる学校になってほしいと思います。

ASF NEWS & NEWS LETTER review

(NEWS LETTER No.280 P05、佐藤 充恵先生のコメント概略)



「自分の発見から自分なりの考えや感覚を持つということはとても重要です。心が動いて、そして見方が変わるという流れを作れるよう授業作りを試行錯誤しています。」

CATEGORY
03



"自ら学ぶ"を大切に 主体性を育む学校



120周年を契機に、聖学院全体で 活気ある学校づくりを

えんどう まりこ
遠藤 茉莉子先生
(女子聖学院中学校・高等学校 保健体育科教諭)

女子聖学院中高は、生徒の主体性を尊重して、やりたいことを実現させてくれる学校です。運動会、記念祭、合唱コンクールなど、いずれも生徒が主体の行事です。教員は、生徒を見守り、決して否定はしません。「まずはやってみようか!」と声をかけ、チャレンジを後押しします。しかし、新型コロナウイルス感染拡大がそうした生徒のチャレンジの機会を奪い、以前のような活気あふれた本来の魅力が減少しつつある気がします。そんな今を、新しい女子聖を創っていくチャンスとポジティブに捉え、女子聖の伝統、女子聖らしさを大切にしつつも、新しい風を取り入れていくべきなのだと思います。聖学院創立120周年を契機に、聖学院全体で盛り上がり、活気ある学校にしたいですね。

CATEGORY
04



学力では測れない 人間教育



他の学校にはない特徴を持った 学校であり続けてほしい

勝倉 雄二 さん
(聖学院小学校 同窓会長)

聖学院は人が成長する上で必要な、心の真ん中あたりのことを教えてくれる、そんな教育のできる学校だと思います。自分の小学校時代のことですが、季節や天候に合わせて屋上や校庭で授業をしたり、必要に応じて時間割を変更するといった柔軟な対応をもらったことは忘れることのない楽しい思い出です。聖学院には、これからも学力のような一般的な社会的尺度だけではなく、他の学校にはない特徴を持った学校であり続けていただきたいと思っています。また、幼稚園から大学まで、変化を恐れずお互いの学校の良い部分を積極的に取り込み、法人全体のレベルを高めていていただきたいと思っています。



聖学院小学校で好きなおとこ

にしやまのあ
右:西山 乃蒼さん(聖学院小学校 2年生)
こばやしあおい
左:小林 蒼依さん(聖学院小学校 5年生)

わたしが、聖学院小学校で好きなおところは、みんなで楽しく学んで、あそんで、お祈りすることです。ほかに、みんなですすけ合う、元気で楽しい学校だと思います。おたん生日の時は、先生がギターをひいてくれたりします。あそびにいれてほしいとき、友だちからさそってくれるのが、うれしいです。わたしは、聖学院小学校が大好きです。(西山さん)

聖学院小学校で、私が好きなおところは「聖学院フェア」があることです。なぜかという、抽選、バルーンフィッシング、スーパーボールすくい、射的など、たくさんのゲームがあって、とても楽しいからです。そのほかに好きなおところは、宿泊行事がたくさんあることです。宿泊行事では、今まであまり話さなかった子と仲よくなったことがとてもうれしかったです。(小林さん)

ASF NEWS & NEWS LETTER review

(ASF NEWS No.60 P05、新井 裕子先生のコメント概略)



「女子聖学院中高は生徒が中心になって物事を進めます。でも困ったときには必ず先生がそばで見守っていて相談にのってくれる。そういう温かさがありました。」



オンリーワン・フォー・アザーズを 体現する学校

みやたかのぶ
宮 隆允先生
(聖学院中学校・高等学校 理科教諭)

聖学院中高は教育の理念である「オンリーワン・フォー・アザーズ」を体現しようとしている学校だと思っています。他のミッション系の学校の多くが同様の理念を持っていますが、聖学院中高の場合は、他のミッション系の学校と違い「オンリーワン」にも焦点が当てられているという特色があります。そしてそれは「個人の意思が尊重され、行動の自由度が高い」という風土を育ててきました。行動の自由度の高さは生徒に限らず教員にも当てはまります。それぞれの想いを駆動力とした個人の力はまさに私たちの強みとなっておりますが、今後はそうした個人の想いが、個人を超えた学校全体の想いとして育ち、さらに強力な全体の力になれば良いなと思っています。



これからも「一人」を大切に 大学でいてほしい

石井 ひよりさん
(聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科 4年)

大学でハンドベル部の部長を経験しました。聖学院の先生や職員の方は、部長という役割を超えて個人として向き合い、寄り添ってくださる方が多くいます。今は部員が与えられましたが、部長として始まった4年の春、部員は自分一人という状況を経験しました。そんな時、コーチや職員からの「一人でも残ってくれたら続けられる。支えるから、一緒にがんばろう。」との言葉に勇気づけられました。私はハンドベルがきっかけで、神様の存在を知りました。聖書に「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」という言葉があり、今の自分を支えています。聖学院はこれからもミッションスクールとして、キリスト教を大切にしてもらいたいと思っています。

キリスト教教育 一人ひとりを 大切にする



変わりやすい世界の中で、 変わらないキリスト教教育を大切に

木村 太郎 先生
(聖学院大学心理福祉学部 チャプレン)

聖学院で勤めて3年目、チャプレンとしては今年から大学3年生の授業を持っています。現在の3年生はコロナの影響によって1、2年次の多くをオンラインで過ごしました。授業のリアクションペーパーを読むと、孤独や分断を経験した苦しみが伝わってくるようです。キリスト教からの問いかけに対し、反発するにしても受け入れるにしても、真剣に応答しようとする姿が見られます。聖書の言葉に慰められた、と語ってくれる学生もいます。この神様からの「問い」は、聖学院がこれまで100年以上守り続けてきた大切な宝物。変わりやすい世界の中で、時が良くて悪くても、これからも変わらずに聖書と礼拝を中心にした共同体であってほしいと思っています。

ASF NEWS & NEWS LETTER review

(NEWS LETTER No.281 P10、高橋 恵一郎チャプレンのコメント概略)



「生徒たちはそれぞれ様々な課題を抱えています。そんな生徒が『あなたはここにいていいんだよ』という言葉が神様から聞けたら、どんなことでも乗り越えていけるのではないのでしょうか。それが『神を仰ぐ』ということだと思います。」



こうすれば もっと良くなる!

- 留学生に加え、社会人もたくさん学んでいるような多様性のあるキャンパスになったら良いと思います。
- 教員も職員も個々が持っている力を共有し、学校全体の力に変えていけたら素晴らしいと思います。

- 学ぶだけではなく、行動に移す力もより一層重視してほしいです。
- 伝統を大切にしながら変化を取り入れる柔軟性を大切にしてほしいです。
- これからも地域に愛される学校だと嬉しいです。

- 幼稚園から大学院まで、学校の枠を超えた縦のつながりを強化していけばもっと良い法人になると思います。
- 聖学院みどり幼稚園の自然豊かで大きな園庭はいつまでも保ち続けてほしいです。

歩む人たち

「卒業生を尋ねて」

16

聖学院中学校・高等学校卒業
さかもと しゅう
坂元 周 さん

●PROFILE

TBWA\HAKUHODO ビジネスプロデューサー所属 Business Producer
聖学院中学校・高等学校 卒業
東海大学 体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科 卒業
大学卒業後は株式会社テー・オー・ダブリュー(TOW)に入社。
Yahoo!(ヤフー株式会社)に5年間勤務の後、現職。



今年、1ヶ月半の海外旅行を体験。10カ国、18都市を訪問し、たくさんの学びを得たそうです。

面白い人たちを集めて「マイチーム」を作りたい

坂元さんが大学在学中に、東海大学の卒業生である原辰徳監督と菅野投手の講演会があり、当時、映像制作などを行っていた坂元さんのもとに、その講演会のアタック映像(イベントのオープニング時に使われる映像)を制作するというチャンスが訪れました。当日、3,000名のお客さんで満席になった講堂で、坂元さんが制作した映像が放映されました。自分の作った映像で会場が湧き上がる光景を見たときに、なんとも形容し難い気持ちよさ、高揚感を感じ、これで生きていくのはめっちゃめっちゃ楽しいのではないかと思っただけです。そしてこの体験が坂元さんの仕事の原点となりました。

大学卒業後はイベント制作などを手がける制作会社に就職します。そこで広告業界のいろはを学びました。そしてフリーに転職。日本トップクラスのIT企業で5年間勤務をしたのち、現在はTBWA\HAKUHODOという総合広告会社のビジネスプロデューサー部に勤務し、企業のブランディング施策やデジタルマーケティング、戦略まわりの提案を行っています。

坂元さんの聖学院観をうかがいました。聖学院中高の生徒は、独特の聖学院らしさがあり、制服を見なくても聖学院の生徒であることがわかるのだと言います。そして聖学院中高は生徒の聖学院らしさを、決して否定せず、壊すことなく、そのまま卒業させてくれます。それはつまり、生徒たちのオンリーワンを先生たちが本心に大事にしてくれているということです。坂元さん自身のオンリーワンは何なのかと質問したところ、「わがまま」という答えが返ってきました。それは自分勝手に、人に迷惑をかけるという意味のわがままではなく、「やりたいことをやる」ということ、チャレンジしたい自分の熱意を何より大切に、一度しかない人生を有意義に生きるということです。そして、坂元さんは、現在の会社でクリエイティブな環境を楽しみ、いずれ、面白い人たちを集めて「マイチーム」を作りたいというビジョンを語ってくれました。



グローバルイノベーションクラスのPROJECTの授業にゲスト参加してくれました。

大学卒業後はイベント制作などを手がける制作会社に就職します。そこで広告業界のいろはを学びました。そしてフリーに転職。日本トップクラスのIT企業で5年間勤務をしたのち、現在はTBWA\HAKUHODOという総合広告会社のビジネスプロデューサー部に勤務し、企業のブランディング施策やデ

デジタルマーケティング、戦略まわりの提案を行っています。

坂元さんの聖学院観をうかがいました。聖学院中高の生徒は、独特の聖学院らしさがあり、制服を見なくても聖学院の生徒であることがわかるのだと言います。そして聖学院中高は生徒の聖学院らしさを、決して否定せず、壊すことなく、そのまま卒業させてくれます。それはつまり、生徒たちのオンリーワンを先生たちが本心に大事にしてくれているということです。坂元さん自身のオンリーワンは何なのかと質問したところ、「わがまま」という答えが返ってきました。それは自分勝手に、人に迷惑をかけるという意味のわがままではなく、「やりたいことをやる」ということ、チャレンジしたい自分の熱意を何より大切に、一度しかない人生を有意義に生きるということです。そして、坂元さんは、現在の会社でク



女子聖学院中高の
用務員さん



支える 人たち

聖学院を外から支えてくださっている人たちに
聖学院への想いをうかがってみました。

No.
06

有限会社日東グリーンベスト
ほり かつあき
堀 克昭 さん

前職であるイベント関係の会社に在籍中、聖学院のイベント設営に参加。その縁で1989年、聖学院小学校から用務員業務を依頼される。その後女子聖学院中高の用務を中心に33年間聖学院に携わる。1989年11月に有限会社日東グリーンベストを設立。

仕事という関係を超えて聖学院に支えてもらった
だから私も生徒の皆さんや学校を支えたい

にこやかな人柄で教職員や生徒に親しまれている女子聖学院中高の用務員、堀克昭さん。実は用務清掃の全般を代行している有限会社日東グリーンベストの代表取締役です。堀さんは1989年から主に女子聖学院中高の校舎敷地を管理されてきました。33年間女子聖学院中高を見てきた堀さんについてうかがいました。

「用務の主な内容は校舎内外の美観管理と清掃です。また生徒の皆さんの登校の安全を見守る立哨業務りつしょう。さらに学校説明会、運動会などの会場設営も行います。清掃においては美観だけではなく建物の管財価値を高めるといっても念頭において業務にあたっています。適切な清掃用具と洗剤選びをすることで汚れを落とすだけではなく建物を長持ちさせることができます。それも含めて我々の仕事と思っています。私は仕事を超え、聖学院にはとても大きな恩を感じています。私の次男が幼い頃、大病を患ったことがありました。その時チャプレンの高橋恵一郎先生たかはしけいいちろうと女子聖学院中高の生徒の方たちが千羽鶴と寄せ書きを1日で用意して渡してくれまし

た。なかなかできることではありませんが、それだけではなく、その後も私たちが親子のために祈り続けてくれました。おかげで次男は快復し、今では立派な大人になりました。先日の記念祭ではその時の感謝を込めて次男も一緒に設営をお手伝いをさせていただきました。本当にありがた限りです。私はこの学校に命を捧げようと思っています。」

堀さんは校舎内のコロナ感染予防のため、毎日共有部の消毒を行なっています。加えてこの季節は学校の樹木から落ちる葉っぱが近隣住民の迷惑にならないよう校舎内外の落ち葉清掃を行なっています。これらの業務のため毎日早朝3時に出動しています。しかもこれは堀さんが自立的に行なっている業務です。「もちろん用務員の立場以上のことはできませんが、生徒や学校のためにできることはしていきたいと思っています」と話す堀さん。かつて生徒、教職員からビジネスという垣根を超えて堀さんへ注がれた「人に仕う」という精神が、今堀さんから生徒、学校へ向けられています。この次々と波紋のように広がっていく関係こそ聖学院が120年前に目指した形なのかもしれません。

聖学院SDGsコンテスト

フォト&ムービー部門

「未来に残したいもの」

受賞作品発表

学校法人聖学院が主催する聖学院SDGsコンテスト。

今年度は従来のフォト&ムービー部門に加え、ソーシャルアクション部門と英語スピーチ部門を新設いたしました。

第3回となる今回、フォト&ムービー部門は「未来に残したいもの」をテーマに、

SDGsにつながる写真や動画合わせて114作品の応募をいただきました。

その中から審査によって選ばれた8作品をご紹介します。

※ソーシャルアクション部門と英語スピーチ部門についてはWebにて受賞作品を公開いたします(12月を予定)。

また、Webにて各部門の受賞作品概要・審査員講評なども公開しています。右のQRコードからご確認いただけます。

SDGsコンテスト[フォト&ムービー部門]概要

- 応募期間 2022年9月1日~10月10日
- 応募方法 2022聖学院ウェブサイトSDGsコンテスト応募専用フォーム
- 受賞種別 最優秀賞(1名)/優秀賞(2名)/佳作(4名)/広報センター長賞
- 応募対象 聖学院で学んでいる方々・卒業生・保護者・教職員・聖学院関係者
- 審査員 石原康男(フォトグラファー)、武本花奈(フォトグラファー)、江崎聡子(聖学院大学准教授)、佐藤慎(広報センター長)、聖学院広報センター



【最優秀賞】

緑との共存

増田 瑞希 さん



今回初めて応募し最優秀賞に選んでいただき大変光栄に思います。今回の写真は山間で撮った写真で、木を伐採することが必ずしも全て人間のためになるのではないということを伝えたくかったです。自然豊かな日本だからこそ緑の大切さをみなさまに感じてほしいです。



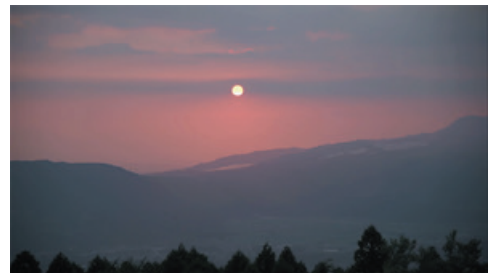
【優秀賞】

初日の出

石島 大輔 さん



今回、受賞したことに驚いています。選んでいただき、ありがとうございます。この写真は江ノ島で撮影しました。朝のとても寒い中、日が昇ってくるのをずっと待っていたので、思うような写真が撮れて嬉しかったです。この写真を撮った時に、自然のエネルギーを感じました。自然の力はすごいと思いました。美しい景色を見られる環境をずっと守っていかれたら良いと思います。



【優秀賞】

普遍の音(動画)

河野 聡一郎 さん



今回は初めて応募させていただき、まさか優秀賞を受賞できるとは思っていなかったためとても嬉しいです。今回の動画は阿蘇山で撮ったもので、普段街中で住む僕たちにとって車の騒音や人の歩く音や話し声など、何かしらの雑音を聞いています。しかし、ここにはそうした雑音は全くなく、本当に静かな場所で、新鮮な体験でした。こうした音風景が少しでも動画で伝わって欲しいと思います。



【佳作】

未来の大人

倉持 美帆 さん



【佳作】

美味しいごはん

A.M さん



【佳作】

新旧共存

三井 奏 さん



【佳作】

フードロス

松井 彩乃 さん



【広報センター長賞】

三つ子の魂百まで

相浦 智 さん

まだまだあります!

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

聖学院大学総合研究所



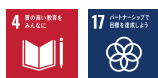
海外との学術交流

「第10回日韓神学者学術会議 (日韓神学シンポジウム2022)」を開催

11月11日(金)、「第10回日韓神学者学術会議(日韓神学シンポジウム2022)」が本学で開催されました。本学学術会議は、2007年に韓国・長老会神学大学の金重恩総長とセムナン教会の李秀英牧師が本学を訪問されたことから始まります。2008年の交流協定締結を経て、2009年に第1回を韓国にて開催。以来、日本と韓国で交互開催され、記念すべき第10回を本学で迎えました。本学にとって大切な海外との学術交流です。なお、前回からつながる「人間論」が主題となりました。両国神学者の交流と友愛を目指し共に進んできた歩みを振り返り、また、さらなる学術と交流の発展を願う語らいの機会となりました。



聖学院中学校・高等学校



3年ぶりのリアル開催

今までにない音を響かせました

11月2日(水)3日(木・祝)は、聖学院中高創立116周年の記念祭が開催されました。

「響 ～今までにない音を～」のテーマのもとで部や、学年のクラス、それぞれ工夫を凝ら



した企画や展示が行われました。来校者の人数制限をするなど、まだまだ感染対策に配慮しての開催ではありましたが、多くの保護者や卒業生の方にご来場いただき、これまでの学習や活動の成果などを発表することができました。

聖学院大学



本学×他大学×企業で開催 聖学院大学サステナビリティ推進センター (SSC) 開設記念イベント

11月16日(水)、本学の学生団体「Petite Arche」や他大学、企業による「聖学院大学サステナビリティ推進センター(SSC) 開設記念イベント SEIG Fashion Revolution 2022～好きなこと×SDGs～」が開催されました。古着ファッションショー等を通してファッションにまつわる問題や課題を考え、多くの方々の行動と協働を誘発し、活性化を促す機会となりました。



聖学院大学



祝・選出 関根清三 特命教授が 文化功労者として顕彰

関根清三 特命教授が2022年度文化功労者として顕彰されました。なお、文化功労者の顕彰式は11月4日(金)に都内ホテルにて行われました。関根清三 特命教授からは「清水正之学長を初めとする同僚・教職員の皆様が温かく見守ってくださり、優秀な院生・学生さんたちが活発に議論に参加してくれたお蔭と、心から感謝しています(一部抜粋)」とコメントをお寄せいただきました。



※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。

※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

聖学院小学校



3年ぶりの宿泊行事へ

聖学院小学校は今年10月、実に3年ぶりに3つの宿泊行事を実施することができました。



・2年生 自然学校（静岡県御殿場市）

5日（水）～7日（金）

東山荘周辺の自然を満喫しました。少し雨も降りましたが、ひるむことなくレインウェアを着てハイキングを楽しみました。入学以来、初めての宿泊行事となりました。



・3年生 清里自然学校（山梨県北杜市）

12日（水）～14日（金）

3日間、各グループにレンジャーが付いて、山道や川ぞいを歩き、ナイトハイクにいたるまで大自然にどっぷりと浸かってきました。



・5年生 イングリッシュキャンプ

（山梨県富士吉田市）

19日（水）～21日（金）

今回初めて、海外からの留学生の方々と英語を使っての国際交流を経験しました。話すだけでなくゲームやクイズ、ハイキングを通してSDGsの学びも深まりました。

子どもたちにとって3年ぶりの宿泊行事は、家族と離れ、非日常の特別な3日間となりました。

聖学院中学校・高等学校

女子聖学院中学校・高等学校

聖学院小学校

聖学院幼稚園



3校、1幼稚園合同の 駒込クリスマスツリー 点火式を開催



11月15日（火）聖学院中高、女子聖学院中高、聖学院小学校、聖学院幼稚園、駒込の3校、1幼稚園合同でのクリスマスツリー点火式が開催されました。聖学院小学校のハンドベル・クラブの前奏ではじまり、聖学院中高、女子聖学院中高の宗教委員長による聖書朗読などがなされました。出席者全員で「きよしこのよる」を賛美の後、聖学院幼稚園年長組による暗唱聖句が行われ、ステージ上と講堂外のクリスマスツリーに灯が点けられました。点火式の日を境にして、駒込キャンパス全体がイルミネーションの輝きに飾られます。

女子聖学院中学校・高等学校



3年ぶりの開催！ 合唱コンクール

10月31日（月）3年振りとなる『合唱コンクール』が開催されました。女子聖の合唱コンクールは生徒会が運営しています。開催実現に向けて練習期間や練習方法に感染防止対策を組み入れたマニュアルを作成し、徹底した上で本番を迎えることができました。中学の課題曲は讃美歌158番「あめにはみつかい」、高校の課題曲は讃美歌235番「主のみたまよ」で課題曲と自由曲とが審査の対象となります。高校は1-1、中学は3-3が1位の座を獲得しました。



女子聖学院中学校・高等学校



なつかしい笑顔にも出会って キラキラした「いま」の瞬間を shareできました

11月2日（水）3日（木・祝）は、女子聖学院中高創立117周年の記念祭が開催されました。「Share Moments, Share Life」というスローガンには、「楽しいという瞬間は一瞬だけれどshareされることで一生のものとなればより嬉しい」という思いがありました。検温や消毒、入場の制限など感染対策に配慮する必要はありましたが、今年は卒業生たちにも来校していただくことができ、なつかしい笑顔と出会うことができました。写真は吹奏楽部。



聖学院幼稚園



聖学院幼稚園110歳のお誕生日

1912年、聖学院幼稚園は「中里幼稚園」として女子聖学院内に誕生しました。110周年という節目を迎えた今年、10月26日（水）に創立の地である女子聖学院のクロソソホールにて記念礼拝が守られました。園児によるハンドベルクワイア演奏や賛美奉献があり、聖書の言葉に耳を傾け、共に祈りをささげました。第二部では、スライドショーを通して「110歳のお誕生日」を迎えた幼稚園の歩みを振り返り、神様と支えてくれた一人ひとりへの感謝を深めました。



聖学院みどり幼稚園



3年ぶりのバザー「みどりフェスタ」開催

10月22日（土）、3年ぶりのバザーを「みどりフェスタ」と名称を改め、在園生、卒園生とその関係者を招いて開催しました。保護者の方が内容を考え準備し、当日の販売や会場運営などを担ってくださり、みなで工夫協力しながら準備を進め、当日を迎えました。全学年の保護者が経験したことのない行事を手探りで取り組んだため、大変なこともありました。在園の子どもたちが楽しんだことはもちろん、久しぶりに幼稚園を訪れる卒園生や保護者の方々も、懐かしさあふれる一日となりました。多くの保護者の方々の思いが形になった素敵なフェスタとなりました。



聖学院小学校



聖学院小学校コンサート ～ウィーン・ピアノ五重奏団～

11月9日（水）、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団元コンサートマスターであるダニエル・ゲーデ氏が率いるウィーン・ピアノ五重奏団のコンサートがチャペルにて行われました。子どもたちは、世界で活躍する演奏家が奏でる美しくも重厚な音色を間近で聴き、見て、肌で感じるという大変貴重な時間を体験しました。音楽の素晴らしさ、演奏会のマナーも学んだこの体験は、子どもたちの心に深く響いたことでしょう。



聖学院幼稚園



今年も開店！ お店屋さんごっこ

園児たちが毎年楽しみにしている行事の一つが、お店屋さんごっこです。11月11日（金）、この日は年長さんやお家の人たちが心を込めて作った品物を並べて、お客さんとなった年中さん、年少さんをお迎えしました。アクセサリー屋さんや、クリスマスのお店など色とりどりの12のお店を開店し、友だちを丁寧に迎えることの大切さや、作ったものを売る喜びを体験した年長さん。年中、年少さんは袋いっぱいの品物と笑顔があふれる時となりました。



編集後記

聖学院は2023年、創立120周年を迎えます。また、2018年に策定した5年間の第一期中期計画を終え、2023年からは第二期がスタートします。中期計画は一部のリーダーが検討を進めていますが、みんなでビジョンを描きたい。もっと幅広い関係者の声を集めるにはどうし

たら良いかという問いから、12月号の編集は始まりました。記事を通して、皆さんにはどんな「ビジョン」が膨らんでくるでしょうか。また、聖学院創設者たちのどんな祈りが届くでしょうか。アンケート（P.01 / QRコード）からもご感想をお寄せください。（松）



|| 140th Anniversary of the
Disciples' mission to Japan ||

2023年、学校法人聖学院は創立120周年

1903年、現在の文京区本郷の地に誕生した神学校から

聖学院の歩みは始まりました

“神を仰ぎ 人に仕う”

この建学の精神を土台に

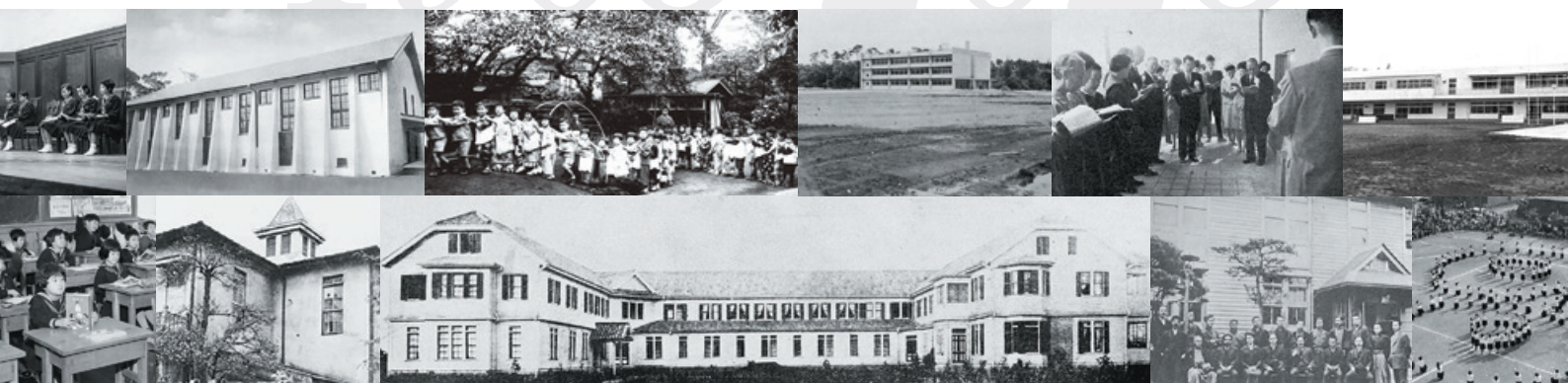
真理を探究すること、神と人間を知ること、社会に貢献することを目指し

「変えることのできるもの」と

「変えることのできないもの」を問いながら

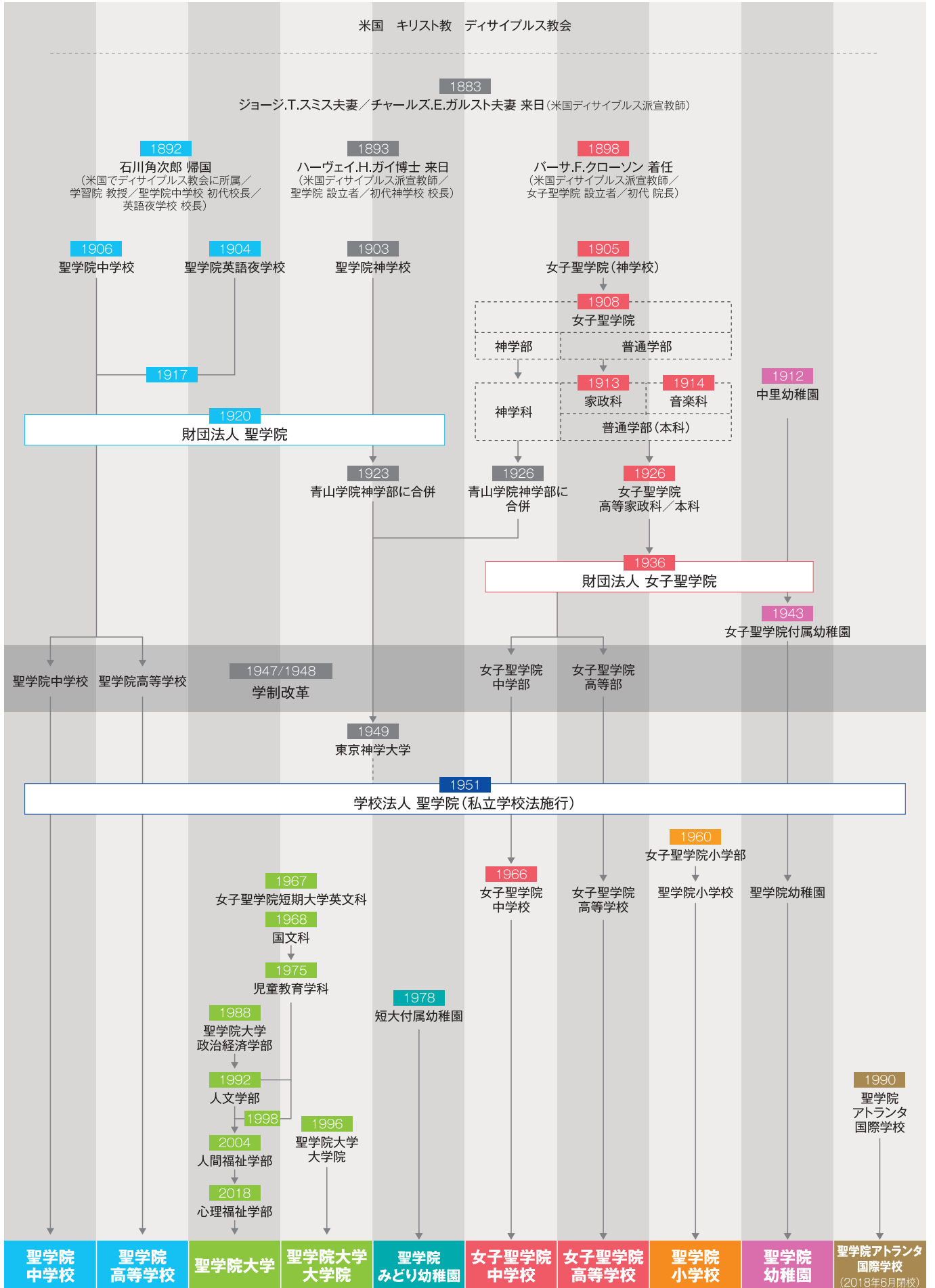
聖学院はこれからも歩み続けます

1903-2023



聖学院の歴史

History of Seigakuin University & Schools



聖学院歴史探訪

#19 聖学院教育の歴史

- 聖学院の創設と発展
(男子)聖学院 上 -



クリスマス期間の聖学院中高校校舎。

1893年秋、ハーヴェイ・H・ガイ博士が宣教師として来日します。ガイ博士は、ドレーク大学で文学士・文学修士および神学士の学位を得、また後年エール大学からも文学修士・哲学博士の学位を授与されるほどすぐれた学者でありました。このガイ博士によって聖学院は創立されたのです。

1903(明治36)年、ガイ博士はまず聖学院神学校を現在の文京区本郷の地に設立してその事業を開始されました。女子聖学院もそうですが、聖学院の教育事業はまず「伝道者養成」から始まったのです。以後ミッションすなわち伝道への使命が聖学院の歴史を貫く根本精神となってまいります。ガイ博士は絶えず日米の親善と平和を願って奉仕しましたが、そのために日本人が「一段高い、人種以上の絶対の宗教の状態、徹底したる宗教の状態に向上」してもらいたいと願ってキリスト教を伝道したのです。しかし、夫人が病気のため、志なかばにしてアメリカへ帰らざるを得なくなり、1907年帰米することになりますが、その後も一貫して日本人との係わりの中で奉仕し、1936年66歳で召天した際、日本政府から叙勲の御沙汰があったほどです。

(次号に続く)

出典：聖学院キリスト教センター編『聖学院の精神と歴史』聖学院ゼネラル・サービス、2006年版(出典より一部変更)

学校法人 聖学院

理事長／清水 正之 院長／山口 博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-8351
ホームページ <https://www.seig.ac.jp/> E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学

・政治経済学部／政治経済学科
・人文学部／欧米文化学科 日本文化学科 児童学科(2023年4月より子ども教育学科)
・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／清水 正之 創立／1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院

政治政策学研究所／文化総合学研究所／心理福祉学研究所
創立／1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園

園長／赤田 直樹 創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校

校長／伊藤 大輔 創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校

校長／安藤 守 創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

聖学院小学校

校長／佐藤 慎 創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園

園長／田村 一秋 創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード(VISA、MasterCard)をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

<https://www.seig.ac.jp/asf/>



住所変更・広報誌の発送停止・お問い合わせ

<https://www.seig.ac.jp/asf/contact/>

学校法人聖学院ASF事務局

Tel 03-3917-8530 (月～金 9:00～17:30)

